

(PDF 版・4の5のエ)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／4 教会の宣教』「二十三節 聞く教会の機能としての教義学——二 教義学の規準」

(文責・豊田忠義)

「二十三節 聞く教会の機能としての教義学——二 教義学の規準」(169-190 頁)

「二 教義学の規準」

(3)「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における「神的愛に基づく父と子の交わりの中で、〔起源的な第一の存在の仕方である〕父は子の父、言葉の語り手〔啓示者・創造者〕であり、〔第二の存在の仕方である〕子は父の子、語り手の言葉〔啓示・和解者〕であるところの行為〔働き・業・行動・性質〕である〔第三の存在の仕方である〕聖霊〔「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)・救済者〕」——この聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性との関係と構造(秩序性)、換言すれば三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に、詳しく言えば客観的なその「死と復活の出来事」としてのイエス・キリストにおける「啓示の出来事」(客観的な「存在的なく必然性>」)とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」(主観的な「認識的なく必然性>」)を前提条件とした(「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」ことに基づいた)ところの、徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性(主観的な「認識的なくラチオ性>」)を包括した客観的な「存在的なくラチオ性>」としての「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帶し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」(「啓示の<>しるし」)としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として(聖書を媒介・反復することを通して)、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」(「教えの純粋さを問う」「教会教義学」、すなわち「福音主義的な教義学」の課題)と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」(純粋な教えとしての

キリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、区別を包括した単一性において「教会教義学」に包括された「正しい行為を問う」「特別な神学的倫理学」の課題）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指す第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての教会「**教義学が、服従しなければならない規準に関する具体的な第三の要求**」は、教会「**教義学が、ちょうど教会を基礎づけている**〔そして、「教会に宣教を義務づけている」第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」〕としての第二の形態の神の言葉である〕**聖書**と〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である〕**教会を形成している父祖たち**と〔教会の＜客観的な＞信仰告白および教義Credoとしての〕**信仰告白に耳を傾けなければならないのと同じように**」、教会が歴史的現存性のただ中に投げ出されその時代と現実**に強いられたところで宣教をなさなければならない限り**、「＜今日＞**教える教会**そのものに対しても、特定の仕方で耳を傾けなければならないということから生じて来る」。「われわれは、そのことから生じて来る要求を、＜教會的な態度＞の要求と呼び、そのことでもって、……**教義学は、教会の宣教を吟味するに際して、その中で教会の宣教が今日なさなければならない具体的な状況、その特定の同時代人に対しての教会の宣教の立場と課題**」、近代以降において人類史の尖端性として世界普遍性を獲得した「西欧の危機」、「西欧思想の危機と帝国主義の終焉」、「時代を画する哲学者は一人もいない……西欧哲学の時代の終焉」、「西欧思想の危機」、「一つの思想形態……一つの世界ビジョン、一つの社会機構であったマルクシズムの危機」、「西欧概念の危機、人間、社会という西欧概念の危機……全世界にかかわる危機」の問題（M・フーコー『思考集成VII』「フーコーと禪」）、日本においては、一方で「骨肉にまで受け入れた西欧近代というものの部分で西欧とおなじ危機に陥っている」・他方で「**西欧的にいえばアジア的という概念で括られる思想的伝統、習慣、風俗、社会構成、文化を引きずっている二重の問題**」（吉本隆明『世界認識の方法』）のただ中に現存する特定の同時代人に対しての教会の宣教の立場と課題、「**換言すれば現代において神によって語られ、教会によって宣べ伝えなければならない神の言葉**〔現存する人間の類の時間性における「＜時代＞の声」にではなく、現存する人間の類の時間性における「時代＜に対する神＞の声」〕に合わせて方向づけなければならないということを理解する」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としてのその「**教義学は**、〔第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して〕**教える教会と共に、その具体的な状況の中に身を置かねばなら**

ず、その状況の中での教える教会の立場と課題を自分のものとしなければならず、神の言葉を現代において現代に向かって語られた言葉〔現存する人間の類の時間性における「現代に向かって語られた」神の声〕として自分の耳で聞こうとしなければならない。何故ならば、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉に属する「パウロはその時代の子としてその時代の人々に語った。けれどもこの事実よりはるかに重要な事柄は、いま一つの実事、すなわち彼は神の国の預言者ならびに使徒としてあらゆる時代のあらゆる人々に語っている、ということである。（中略）聖書の精神は永遠の精神なのである。かつての重大問題は今日もなお重大問題であり、今日の重大問題で単なる偶然や気まぐれでない事柄は、またかつての重大問題と直結している」（『ローマ書』）からである。生来的な自然的なわれわれ人間は、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「神に敵対し神に服従しない」のであり、「肉であって、それゆえ神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持ってはいない」のであり、（例えば、マタイ14・26－31、26・69以下における）使徒ペテロ自身がそうであったように、生来的な自然的なわれわれ人間は、「『もちろん福音をわたしは〔確かに〕聞く、だがわたくしには〔確かに〕信仰が欠けている』その通り——一体信仰が欠けていない人があるであろうか。一体誰が信じることができるであろうか。自分は信仰を『持っている』、自分には信仰は欠けていない。自分は信じることが『できる』と主張しようとするなら、その人が信じていないことは確かであろう。（中略）信じる者は、自分が——つまり〔生来的な自然的な〕『自分の理性や力〔知力、感性力、悟性力、意志力、想像力、自然を内面の原理とした禅的修行等々〕によつては』——全く信じることができない」のである（『福音主義的神学入門』）。したがって、例えばイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける「啓示自身」は、その「啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているのであるから、「福音と律法の＜真理性＞における福音の内容」は、聖書的啓示証言に依拠して、次のように理解されるべきである——「神は、神なき者がその状態から立ち返って生きるために、ただそのためにのみ彼の死を欲し給うのである……しかし誰がこのような答えを聞くであろうか。……承認するであろうか。……誰がこのような答えに屈服するであろうか。われわれのうち誰一人として、そのようなことはしない！ 神の恩寵は、ここですでに、恩寵に対するわれわれの憎悪に出会う。しかるに、この救いの答えをわれわれに代わって答え・人間の自主性〔・自己主張・自己義認の欲求〕と無神性〔・不信仰・真実の罪〕を放棄し・人間は喪われたものであると告白し・己に逆らって神を正しとし、かくして神の恩寵を受け入れるということを、〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の〕神の永遠の御言葉が（〔その「外に向かって」の外

在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方である言葉の受肉としての」肉となり給うことによって、肉において服従を確証し給うことによって、またこの服従において刑罰を受け、かくて死に給うことによって〔復活に包括された死によって〕引き受けたということ——これが恩寵本来の業である。これこそ、イエス・キリストがその地上における全生涯にわたって、ことにその最後に当たって、われわれのためになし給うたことである。彼は全く端的に、信じ給うたのである（ローマ三・二二、ガラテヤ二・一六等の『イエス・キリスト<の>信仰』は、明らかに〔**徹頭徹尾神の側の真実としてのみある**〕**主格的属格**〔「イエス・キリストが信ずる信仰」〕として理解されるべきものである）。したがって、それは、イエス・キリストが、われわれ人間のために・われわれ人間に代って、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事において、われわれ人間の「神の恩寵への嫌悪と回避に対する神の答えである刑罰（死）を、唯一回なし遂げ給うた」ところの「律法の成就」・「律法の完成」にある。すなわち、それは、われわれ人間からは「何ら応答を期待せず・また実際に応答を見出さずとも、〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固執するという<方式>の下で、〕神であることを廃めずに、何ら価値や力や資格もない罪によって暗くなり・破れた姿のわれわれ人間的存在を己の神的存在につけ加え、身内に取り入れ、それをご自分と分離出来ぬように、しかも混淆〔・混合・共労・共働・協働・協力〕されぬように、統一し給うたということを内容としている」、それ故に「福音と律法の<現実性>における勝利の福音の内容」は、聖書の啓示証言に依拠して、次のように理解されるべきである——『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、<私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔**徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって**〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである」、それ故に「人間の人間的存在が〔生来的な自然的な〕われわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、〔生来的な自然的なわれわれの〕人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外

の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」（『福音と律法』）。この聖書の啓示証言に聞き教えられることを通して教えるという仕方におけるトータルな「福音と律法」理解は、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における現在の問題を包括し止揚し克服し得るところの、未来に生きる言葉としてのそれである。それは、まさに現在を通して未来に生きる言葉である。

第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての「教義学」は、「問題、心配、困惑、希望〔「現代における教会の行為、働き、戦い、苦悩」〕」から要求される「教会管理と無条件的に連帯責任的に結ばれていることを知り、その無条件的な連帯責任性からして思惟し語って行かなければならない」。第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「**教義学**」は、第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して「**教える教会と共に、＜祈り＞の交わりの中で、過去から現在を通して未来へと進まなければならない**」〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の＜しるし＞」としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、「祈りつつ」、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、「キリスト教に固有な」類の深化と豊富化という時間累積を進めて行かなければならず）、**徹頭徹尾教える教会と共に、神の啓示と和解という善き業の故に、〔聖書の啓示証言におけるキリストにあつての神としての〕神に感謝し、神を讃えなければならない、教える教会と共に、全教会がこのよき業に対して絶えず犯しているすべての過ちの故に悔改めなければならない、教える教会と共に、聖霊を、換言すれば〔聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、「祈りつつ」、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の〕神の言葉を新しく、よりよい仕方、より決然と聞き、それからまた神の言葉の祝福を受ける可能性を願い求めなければならない**ということと言わなければならない〕。何故ならば、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学における思惟と語りと行動が、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないか」ということは、**神ご自身の決定事項であって、〔全教会の全成員である〕われわれ人間の決定事項ではない**」からである、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学における思惟と語りと行動は、徹頭徹尾「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈りの態度」〕に対し神が応じて下さる〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「祈りの聞き

届け」] ということに基づいて成立している」からである。このような訳で、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学」は、「教会のすべての語りの最後の意味としてのその祈りの声」——すなわち「人間の前で、人間に向かってなされるのではなく」、「人間のために〔聖書的啓示証言におけるキリストにあっての神としての〕神の前で、神に向かってなされる〔第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である〕教会の語り、そして〔聖書に、絶えず繰り返し、聞き教えられることを通して教えるという仕方、〕人間のところに教会が預言者的に近づいて行くことの前提を形造っているところの、人間のためになされる祭司的な仲介の声に注意深く耳を傾けなければならない」。「古代教会から伝わった……〔第三の形態の神の言葉である〕教会の教えの決定的な源泉としての教会の<典礼>」——第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「使徒タチニヨッテ伝エラレ、<信仰ノ掟ガ祈祷ノ掟ニヨッテ確定サレルヨウニ>、〔聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である〕全世界ノカトリック教会ニオイテ同ジョウニ行ナワレテイルトコロノ〔三位相互内在性〕における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕主ノ司祭的祈祷ノ奥義」、「スナワチ、〔第三の形態の神の言葉に属する〕聖ナル民ノ指導者タチハ、自分ニ託サレタ職務ヲ果タス時、人類ヲ代表シ、全教会ト協力シテ、神ノ慈悲ニヨリスガリ、……<未信者>ニ信仰ガ与エラレ、<偶像崇拜者>ガソノ不信仰カラ解放サレ、<ユダヤ人>ノ心カラ覆イガ取り除カレテ真理ノ光ガ現ワレ、<異端者>ガトリックノ信仰ヲ受ケ入レテ悟ルニ達シ、<離教者>ガ新生ノ愛ノ精神ヲ取り戻シ、<堕落シタ人々ニ悔悛ノ治療薬ガ与エラレ、ソシテ最後ニ<洗礼志願者>ガ再生ノ秘跡ニ到達シテ天国ノ憐レミノ広間ガ開カレルヨウニト祈ルノデアル>」、「……コレハ<完全ニ>、<神ノ業トシテ感ジラレルモノデアルカラ、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」の基づいて〕コノヨウナ人タチヲ照ラシ、善ニ移ラセル神ニ対シテ、常ニ感謝ト讃美トガササゲナラレルノデアル>」（「教皇ケレスティヌス一世……神ノ恵ミニツイテ」）。この「典礼に対して優越した法廷は、その同じ文書によれば、〔第二の形態の神言葉に属する〕『使徒的座』の決断から成り立っており、典礼そのものにおいては、明らかに〔第三の形態の神の言葉である〕教会の祈祷の行為をもって遂行して行くことよりも、伝えられた典礼的な式文〔「**一個の権威ある伝承**」〕そのものが考えられている」。「この〔第三の形態の神の言葉である教会の〕**祈祷の規準**こそが、また正しい信仰と正しい宣教の規準でなければならないし、事実正しい信仰と正しい宣教の規準である……」。「この警告から」すれば、「ローマ・カトリック」は「逸脱の領域にいる」のである。何故なら

ば、第三の形態の神の言葉である「教会の教えは、教会のただ中において、そのようなものとして働いている未信者、偶像崇拜者、ユダヤ人、異端者、離教者、墮落した人々、洗礼志願者のための祈祷の聖ナル行為が行われている事実を堅く取って離さないでいなければならない」からである。

教会が不可避的にある人間の類とその時間性（人類史、歴史、世界史）としての歴史的現存性のただ中に存在しその時代と現実が強いられたところで、「キリスト教に固有な」類と時間性を生きることからして、詳しく言えば現存する教会がそれぞれの時代、それぞれの世紀においてその時代（世紀）と現実が強いられたところで、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書（すなわち、その最初の直接的な第一の「啓示の＜しるし＞」、「啓示ないし和解の＜しるし＞」、「啓示ないし和解」の「概念の実在」、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である「教会の＜客観的な＞信仰告白および教義としてのCredo」の時間性（すなわち、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学の時間性、「聖書によって宣教を義務づけられた」「説教および聖礼典としての教会の宣教」史、「信仰告白および教義」史、「Credo」史）を生きることからして、また個体的自己としての全成員も自分の意志とは無関係に不可避的にその歴史的現存性のただ中にある親のもとで生誕し個体的自己としての人間としてその生誕から死までの時間性（個体史、自己史）を生きることからして、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能（教会的な補助的奉仕）としての教会教義学（福音主義的な教義学）が要求する「**教会的な態度**」は、**第一に、「いわば＜無時間的に＞思惟し語る教義学の可能性を閉め出す**」。第二の形態の神の言葉である「聖書と〔第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白および教義Credoとしての〕教義」は、「そのほかの哲学と競合する、あるいはまた協力して働くキリスト教哲学として」、「研究し記述するための有用な源泉という性格を持つてはいない」。したがって、「哲学、歴史学、心理学等は、神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった」し、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」し、混合神学における「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」し、「キリスト教哲学は、それが哲学であったなら、それはキリスト教的ではなかった」し、「それがキリスト教的であったなら、それは哲学ではなかった」。言い換えれば、「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通した第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能として

の〕神学は哲学的試みが終わるところから始まる」し、神学も自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使しての知的営為ではあるが、「神学は方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」（『バルトとの対話』）。第二の形態の神の言葉である「聖書と〔第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白および教義Credoとしての〕教義」は、「関係について語っておらず、出来事について語る」、「事柄についてではなく、行為について、それとしての存在についてではなく、その現実存在について語る」、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動、客観的なその「死と復活の出来事」としてのイエス・キリストにおける「啓示の出来事」（客観的な「存在的なく必然性＞」）とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（主観的な「認識的なく必然性＞」）を前提条件とした（「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」ことに基づいた）ところの、徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性（主観的な「認識的なくラチオ性＞」）を包括した客観的な「存在的なくラチオ性＞」としての「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）、自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、われわれの神としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方（父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）、すなわち起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体について語る、「まさに、ただそこで出来事、行為、それらの現実存在が問題である限りにおいてだけ、関係、事柄、存在について語る」。**第二の形態の神の言葉である聖書の中で証された起源的な第一の形態の「神の言葉は、学園（アカデミー）を基礎づけるのではなく、教会を基礎づける」**、「また、学園は、それが神の言葉の奉仕の中で要求される限り」、「ただ〔「特定の時に、特定の場所で、神の言葉の現実存在を通して基礎づけられ保持される」〕教会の学園であることができるだけである」。「根本において、神、人間、世に関して事情はどのようなものであるかということを問う問いは、それ自体一つの事柄である」が、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学に対しては、〔「神と人間の前で責任を果たして行かなければならない教会の中で、教会と共に、どのように教会は義務にふさわしい仕方ですその責任を果たして行くべきかについて思索し、義務にふさわしい仕方です責任を果たすよう指導を与える」という〕別な事柄が定めら

れている」。すなわち、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学は、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書と〔第三の形態の神の言葉である教会の＜客観的な＞信仰告白および教義Credoとしての〕教義の中で、自分で立てた問いに対する答えを尋ね求めるのではなく、……教会がその働きをなしに行くため、その戦いを戦って行くため、またその避けることのできない誘惑と苦難のため必要としている反省的熟慮に対して奉仕しなければならない」。第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「**教義学は、自分ではっきりそう言明しているように、あくまで〔ある歴史的現存性のただ中に投げ出されその時代と現実に強いられたところの、**「それぞれその困窮と希望を持った」「時間の中に存在する」**】戦う教会の道具〔教会的な補助的奉仕〕である**」。

第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学（福音主義的な教義学）が要求する「**教会的な態度**」は、**第二に、「＜審美的に＞思惟し語る教会の可能性を閉め出す**」。何故ならば、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者とした第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「**教義学が取り組まなければならない対象**〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証された起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身〕が、**その特有な、全く独一無比でさえある美を持っている**」からである、それ故にその「特有な、全く独一無比でさえある美を持っている」「対象そのものを通して自分が捕らえられているとみなす代わりに、そのような美を〔主観的に、恣意的独断的に〕観察すること自体に身を捧げ、〔対象そのものを通して自分が捕らえられている〕われを忘れるとすれば、その瞬間直ちに〔その美は、彼の人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された彼の意味世界・物語世界における〕偶像が持つ美しさになってしまう」からである、その時にはそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としないのであるから、「そこには、ただ〔主観的な〕観察する主体そのものの中にだけ、換言すれば観察する主体の空想の恣意〔主観性、恣意性独断性〕の中に、その起源とその正当性」があるだけだからである。「論理的な、歴史的な、言語的な、また法的な美学——その道の上では、〔その〕教義学〔における美学〕は、突然自分の対象を見失い〔突然「特有な、全く独一無比でさえある美を持っている」「対象を見失い」〕、それと共に、その課題に対して疎遠となることができるだけである」。第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学は、概念の厳密な意味で、教会を＜建てる＞ところのもの、換言すれば殺した生かす……ただそのような神の言葉の支配

だけを問わなければならない」。第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学が、この点で、ただ自らを清潔に保つ時にだけ、教義学は、繰り返し自分の対象のあの美しさに出会い〔すなわち、繰り返し「特有な、全く独一無比でさえある美を持っている」「自分の対象のあの美しさ」に出会い〕、期せずして純粋に感謝に満ちた考察となることができるし」、また「教義学」は、「そのような感謝に満ちた考察とならなければならない」。

第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学（福音主義的な教義学）が要求する「**教会的な態度**」は、第三に、「＜ロマンチックな＞教義学、換言すれば誠実に現代の教会からして語っているのではなく、多かれ少なかれ首尾よく批判的にあるいは批判的でなしに自分自身を昔の時代に戻しながら、〔復古主義的に〕教会の過ぎ去ったどこかの世紀からして思惟し語る教義学の可能性を排除する」。何故ならば、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学（福音主義的な教義学）が要求する「**教義学の信仰告白的な態度**」は、それぞれの時代においてその時代と現実とに強いられて現存している教会からして、教会「**教義学が教会の歴史と不断に接触していなければならない**」、また「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間「イエス・キリストは、きょうも、きのうも、いつまでも変わることがない」ことからして、それ故にそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉でイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）からして、**教会教義学が「すべての時代のまことの教会と一つである一致の中で思惟し語らなければならない」からである**。このことは、第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学が、自分を原始教会の教義学として打ち出さなければならないとか、あるいは四世紀、十六世紀、十七世紀の教義学として打ち出さなければならないということを意味しない」。復古主義における「過去の＜まことの＞教会の幽霊も、それとして、教会を、その都度の現代の時代精神に劣らず、迷わせ、誘惑することができるのである」。それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉でイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、それぞれの時代においてその時代と現実とに強いられたところで、「キリスト教に固有な」類の深化と豊富化という時間累積をなして行くことが問題である。

「まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会」については、「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その1）＜イエス・キリストにおける神の自己啓示＞および＜その自己証明能力の総体的構造＞ならびに＜まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会＞を参照されたい。

第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学（福音主義的な教義学）が要求する「**教會的な態度**」は、「最後に、＜世俗的な＞**教義学、換言すれば……逆に……その都度の現代の……時代精神に奉仕することへとおもむくであろう教義学の可能性を排除する**」。「その際……その〔人間の類の時間性における現在としての時代の精神——その〕**時代精神が、教會的な、そして神学的な時代精神であり得るということも注意されなければならないことである**」。何故ならば、近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の信仰・神学・教会の宣教が、近代的な人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍に依拠し、その一面だけを形而上学的に抽象し固定化し全体化して、聖書的啓示証言における「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間「イエス・キリストの永遠のまことの神性の告白を信用しない場合」、「和解に関して言えば、赦す神が〔それが「罪なき穢れ無き」まことの人間であれ〕人間に内在しなければならないことになり、その認識自体が〔自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階における〕思弁でしかないものであり」、その時には「イエス・キリストは、下からの半神、超人、人間の最深の本質、最高の理想という空虚な概念でしかなくなってしまう」からである、人間中心主義的な近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の信仰・神学・教会の宣教の典型としての「シュライエルマッハー」や「シュライエルマッハー以外の〔ブルトマン、モルトマン、エーバーハルト・ユンゲル、ベルトルート・クラッパート、ルドルフ・ボーレン、滝沢克己、八木誠一、大木英夫等々〕他の人々所においても」、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞（『ローマ書』）を認識し自覚し堅持しないところの、「人間の自己運動を神のそれと取り違えるという混淆」、「神の自由を認識していないという事態」を惹き起こす「ヘーゲルの強力な痕跡に遭遇する」からである。「要求されている〔第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会〕教義学の現代性あるいは現実性」は、「教義学が、何らかの時代の声、何らかの仕方で政治的、精神史的、社会史的、教会史的に規定された現代の姿そのものの、あたかもそのようなものが教会の宣教における標準〔・規準・原理〕となりうるかのよう

に、代弁者として語るということ」、また「教義学が、自分自身を、教会内のあるいは教会の外の同時代人の人々が教会の宣教に対して心にかけている重荷、関心事、

願望の口および弁明者とするということ」、「ましてや教義学が、教会の歴史の告知者として教会の宣教の内容として新しい啓示を提示して行くことから成り立っていることはあり得ない」。第三の形態の神の言葉である教会の宣教における一つの補助的機能としての教会「教義学」は、「現代において、現代のために、……＜時代＞の声を問うのではなく、時代＜に対する神＞の声を問い、そこから来る重荷、関心事、願望に対して、場所を与えなければならない」。このことは、「教会の説教が、そのことをしなければならないのと同様である」。